JIC インフォメーション第 228 号 2024 年 1 月 15 日発行(1)



第228号 臨時号 2024年1月15日 年4回 1·4·7·10月の10日発行 1部500円

発行所:JIC国際親善交流センター 発行責任者:伏田昌義

はりねずみのジェーニャ

https://www.jic-web.co.jp

東京オフィス: 〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-10-5 岡田ビル 6 階 TEL:03-3355-7294

jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0012 大阪市中央区谷町 2-2-22 NS ビル 5 階 TEL:06-6944-2341

シア・旧ソ連











写真は、本紙記事より抜粋

連 国際交流誌

2024年を日ロ関係『再起動』の年に! ・・・・・・・・伏田 昌義・・・2P 《ロシア関係情報》日ロ協会、日ロ交流協会の講演会ほか・・・3P 創価大学・ロシア語スピーチコンテストの報告・・・・・・・・5P

≪連載≫ こんな時代にロシア語のすすめ

≪本の紹介≫「女たちの独ソ戦」、ほか・・・・・ 7P

《本の紹介》 予告編/『舟』〜北方領土・志発島で起きた

≪講演要旨≫「中ロ国境問題の解決の分析」

····井出 敬二 (立教大学法学研究科 講師) ·····10P

≪講演録≫ 「スラヴ民族―分裂と紛争」

····石郷岡 建(毎日新聞 元モスクワ支局長) ····13P

JICでは、Jクラブ(JIC友の会)会員を募集しています。 年4回の情報満載のインフォメーションをお届けします。 JIC インフォメーション第 228 号 2024 年 1 月 15 日発行(2)

ウクライナ戦争、停戦への動きが出てきた今ごそ言おう

2024年を日口関係「再起動」の年に!

伏田 昌義 (JIC 国際親善交流センター副会長)

2022 年 2 月に始まったウクライナ戦争は、いまだ終結の確かな展望が見えないまま 3 年目に入ろうとしています。この間、米英欧州諸国と歩調を合わせた対ロ制裁措置によって、日本とロシアの交流は、政治・経済・文化・社会全般にわたって事実上の中断を余儀なくされています。

ウクライナ戦争は、昨年6月から始まったウクライナ側の 反転攻勢が、当初のウクライナ政府の発表や日本の大手マス コミが連日報道したほどには成功せず(ウクライナ軍が押し 返した距離は最大で10km)、膠着状態に陥っています。戦闘 の長期化により、前線では消耗戦が繰り広げられており、物 量でまさるロシア軍が東部ドネツク州で占領地を拡大しさえ している状況です。ウクライナ軍はもっぱら米英 NATO 諸 国からの軍事支援で支えられており、米欧諸国のいわゆる「支 援疲れ」にともなって、継戦能力の低下が現実化しつつあり ます。ゼレンスキー大統領は相変わらず「クリミアを含む全 領土の奪還」を目標に掲げ一歩も引かない構えですが、米欧 とくにアメリカでは全領土奪還の方針を諦め、現在の戦線(境 界線)を前提とした停戦協議を開始すべきだとの議論が広が っています。

「正義論」を振りかざせば、どちらかが倒れるまで戦い続けるしかありません。ゼレンスキー大統領の立場はまさにこれですが、しかし戦争が続く限り、双方の人命と国土の破壊は続きます。もうこれ以上の人命と国土資源の損耗を止めにするために、双方不満であっても、まずは現状で停戦を実現し、武力行使のない条件下で長期的な和平交渉を粘り強く進めるしかないと思われますが、いまだその機は十分に熟していないのかもしれません。おそらく、この冬から今年夏にかけて、再度ウクライナ軍の反転攻勢が試みられるのでしょうが、その結果を受けて停戦協議が始まるかどうか、まだしばらくは見守るほかないようです。

しかし、仮に停戦協議が始まり、和平への動きが進みだしたとしても、現状ではクリミアと東部2州・南部2州をロシアが併合した状態は大きく変化しないでしょうから、欧米そして日本の対ロシア制裁措置は今後も相当長期間にわたって

継続されるだろうと予想されます。

同時に、このウクライナ戦争、またパレスチナ・ガザ地区へのイスラエル軍の侵攻をめぐって露呈したように、国際社会では、ウクライナ、イスラエルを支援する米欧日の経済先進諸国と、必ずしもそれに与しないグローバルサウス=アジア・アフリカ・南アメリカの新興発展諸国との対応の違いが明らかになりました。武力不行使の国連憲章に違反してウクライナに侵攻したロシアを厳しく非難する一方、パレスチナの占領地で国連安保理決議を無視して入植地を暴力的に拡大するイスラエルを擁護し、ガザ地区市民の無差別殺戮とも言える軍事侵攻を支援し続けるアメリカと欧州諸国のダブルスタンダード(二重基準)に、多くのアジア・アフリカ諸国は不信を強めています。

「民主主義・自由主義」を標榜する米欧日に対して、これまで「民主主義・自由主義」の名のもとに、どれほどの搾取と暴力が途上国に対して行われてきたか、そのダブルスタンダードを糾弾し、対等・平等な政治的経済的関係を求めるグローバルサウス諸国の動向が、今日の国際関係において重要な要因となっています。おそらく、G7に代表される米欧日の経済先進諸国と、G20やBRICSに代表されるグローバルサウス諸国との、協調と対立のなかで、第二次大戦後に作られた現在の国連体制(その機能は常任理事国=米英仏露中5カ国の拒否権によって半麻痺状態にあるわけですが)を見直し、新しい国際秩序を構築するための模索が続いていくのだろうと思われます。

ロシア、中国、そしてインドなどの諸国が、グローバルサウスに大きな影響力を持っていることは紛れもない事実であって、ウクライナ戦争の後は、米欧日のいわゆる西側諸国としても、ロシアをいかに国際舞台に再度組み込んでいくのかが大きな課題となります。

この時、日本としては、ロシアに対して米欧諸国と軌を一にした経済制裁と封じ込めを続けるだけでいいのかどうか、 中断したままになっている日ロ平和条約交渉はどうするのか、 JIC インフォメーション第 228 号 2024 年 1 月 15 日発行(3)

お互いに引っ越しのできない隣国であるロシアと今後どのような政治的・経済的・文化的関係を独自に取り結んでいくのかが問われることになります。

昨年12月に8年間にわたる任期を終了した上月豊久駐ロシア日本大使が離任会見で述べたように、「(ウクライナ戦争以来、平和条約交渉が中断し日ロ関係は停滞しているが)ロシアが隣国であることに変わりはなく、両国の国民の人間的なつながりを維持することが将来の関係を築くうえで重要な基盤になる」ことは間違いありません。

すでにコロナとウクライナ戦争によって、日ロの人的交流 はまるまる4年間の中断が続いています。このままでは、ロシアを知り、その内的論理を理解したうえで、この国との将 来の関係修復を担う若い人材が著しく失われるのではないか と危惧します。

日本国内では、反ロシア・親ウクライナの欧米シンクタンクの一面的な戦況評価ばかりが大きく取り上げられ、欧米諸国でも軍事支援の拡大に反対し停戦交渉の開始を求める人々の声や、ロシア国内での人々の実際の動きなどはほとんど聞こえてきません。米欧の報道機関がウクライナの戦場での取材を果敢に実行し、その塹壕戦の実態をかなり正確に報道しているのに比して、日本ではそのような取材報道が全く見られないのは残念なことです。

日本国内に蔓延する反口気分の中で、旅行・観光を通じて 日口の人的交流を下支えする私たちロシア専門旅行社の業務 は、2020年の春以来、縮小と後退を食い止められずにいます。 日本からロシアに向かうアウトバウンド旅行は、ビジネス関 係者の業務渡航かごく少数の留学渡航に限られ、一般的な観 光旅行はまだまだ難しい状況です。一方、ロシアから日本へ のインバウンド旅行は、少人数の観光グループの訪日が復活 してきているとはいえ、コロナ前の通常水準にはほど遠いレ ベルです。

私たちJICは、日本とロシアとの将来の関係再構築の条件を作り出すために、引き続き旅行・観光交流と文化交流の継続に取り組みます。現在、日本の国内世論や人々の対ロ感情は決して良くありませんが、日ロ協会や日ロ交流協会、その他の多くの交流団体と連携して、挫けず、諦めず、粘り強く、将来の関係改善と協力拡大のために、細くなった日ロの関係をつなぎ続けたいと思います。

2024年を日ロ関係「再起動」の年に! 皆様のご支援、ご協力をお願いいたします。

日口交流情報

活発化してきた各団体の動き

昨年秋から年末にかけて各地で行われた日ロ交流団体の活動で、いくつか目についたものを紹介します。コロナ禍、ウクライナ戦争で逼塞していた交流活動にもようやく活発化の 兆しがでてきました(編集部)。

日本ロシア協会の講演会(12月23日)

『ロシア芸術とわたし』~亀山郁夫氏

12月23日、東京の鳩山会館(文京区音羽)にて、日ロ協会(高村正彦会長)の講演会が開催されました。講師は、ロシア文学者の亀山郁夫氏(名古屋外国語大学学長)。「ロシア芸術とわたし」と題して、主に亀山先生の音楽遍歴、その中でのロシア音楽の魅力、とくに 20 世紀の作曲家の双璧をなすセルゲイ・プロコフィエフとドミトリー・ショスタコービッチについて話されました。

講演会後のアトラクションでは、バラライカ奏者のマキシム・クリコフさんが、ロシアと日本の楽曲をメドレー演奏し、参加者の盛んな拍手を浴びました。



ソプラノ歌手・天野加代子さん

在大阪ロシア領事館でコンサート

12月16日、「天野加代子と日ロの素晴らしい仲間たち2023」と銘打って、ソプラノ歌手・天野加代子さんのコンサートが、大阪府豊中市のロシア総領事館で開催されました(関西日ロ文化サロンとの共催)。コンサートには天野ファンや大阪のロシア関係者約100名が参集して、その美しい歌声を堪能しました。また、2人のプロ・バレリーナがゲスト出演し、可憐なダンスを披露しました。

JIC インフォメーション第 228 号 2024 年 1 月 15 日発行(4)

天野加代子さんはロシア国立モスクワ音楽院声楽研究科を 修了後、外国人で初めてモスクワ国立音楽協会専属のソリス トとなり、毎年ロシアと日本の各地でコンサートを行ってい ます。

「現在のロシアを知るにとが大事

大阪日口協会が講演会(11月10日)

大阪日ロ協会(藤本和貴夫理事長)の「現在のロシアを知る」講演会が、11月10日、大阪市内のエル大阪にて開催されました。講師は五十嵐徳子・天理大学国際学部教授。「コロナ前後のロシア〜見て、聞いて、感じた2020-2023年雑感」と題して、最近のロシアの状況がたくさんの写真やビデオをつかって紹介されました。講演では、コロナやウクライナでの戦争があっても、隣国ロシアへの関心を持ち続け、ロシアの人々の実際の姿を知ることの重要性が話されました。

また、講演会には、ホームステイ交流で来日していたペテルブルグ露日友好協会のダーンシナ・ソフィアさんが飛び入り参加。ペテルブルグで活発に続けられている日本語教室や生け花、折り紙教室の活動などが紹介されたことも有意義でした。



情熱と哀愁のロシア音楽のタベ

TENGO のコンサート(10 月 29 日)

ヴァイオリン (天野紀子) とアコーディオン (後藤ミホコ) のユニット・TENGO のライブが、10月29日、大阪・梅田でありました (関西日ロ文化サロン主催)。「黒い瞳」に始まって、日本の歌曲やハンガリー舞曲なども間にはさみながら、ロシアのクラシック音楽とロシア民謡(ポーリシュカポーレ、カリンカ、カチューシャ、ともしび、遠い道など) がぎっしり詰まったとても楽しい演奏会でした。

ウクライナ戦争で、ロシアの音楽や文化・芸術を楽しむこ



とすら憚られる空気がありますが、それでもロシアは数々の 文学者、音楽家、舞台芸術家を輩出してきた国。その文化に 触れることで、ロシアを理解し、将来の平和な関係を築く基 礎を作っていく必要があると思います。

日口交流協会の講演会(11月26日)

「中国・ロシア国境交渉を振り返る」

11月26日、東京・港区の新橋生涯学習センターにて日ロ交流協会(服部文男会長)の講演会が開かれました。

「中ロ国境問題の解決の分析」と題し、元外務省職員の井 出敬二氏(立教大学法学研究科講師)が中国、ロシアの日本 大使館に外交官として勤務した経験を踏まえて、中ロ国境交 渉の解説と、中国とロシアとの関係について講演を行いまし た。(講演要旨は本誌 10 頁に掲載しています)

鎌倉国際交流フェス(11月5日)

湘南ロシア倶楽部がピロシキ販売

鎌倉大仏(高徳院)の 境内で毎年行われている 鎌倉国際交流フェスティ バルに、今年も湘南ロシ ア倶楽部(渡辺雅司理事 長)が市内 15 の国際交 流団体とともにブースを 出しました。今年の「目 玉商品」は淡路島のロシ アンキッチン・イリーナ



から取り寄せたピロシキとビーフストロガノフ。JIC もロシアの塗絵や中央アジア産の食材を提供して協力しました。人気はやはりピロシキで、この日たまたま観光で訪れた人も含めて多くの参加者が『ロシアの味』を楽しみました。

JIC インフォメーション第 228 号 2024 年 1 月 15 日発行(5)

日口友好愛知の会が連続講演会

ロシア的なものとは…私の感じ方

亀山郁夫先生の土曜講座

日ロ友好愛知の会(小林功理事長)は、昨秋、愛知ロシア音楽研究会と協力して、名古屋外国語大学の亀山郁夫学長を講師に、連続講座を開催しました。「ロシア的なものとは〜私の見方、聴き方、感じ方」と題して、10月7日、11月25日、12月16日と3回連続で、ロシアの音楽と文学を中心に、亀山先生が『ロシア的なるもの』について、その魅力をたっぷりと語られました。

ロシア語映画発掘上映会(12月24日) ガイダイ監督最後の作品を上映

前号で紹介した守屋愛さんのロシア語映画発掘上映会が12月24日、東京港区の札ノ辻スクエアで開催されました。上映されたのは、1960~70年代のソ連で絶大な人気を誇ったレオニード・ガイダイ監督のコメディ映画「デリバソフスカヤ通りは晴あるいはブライトン・ビーチはまた雨」(1992年作)。公開されたのはソ連解体後ですが、製作されたのはペレストロイカ期のソ連時代末期で、ソ連ネタ満載の笑える映画でした。

上映後は、筑波大学の梶山祐治氏が「ガイダイとペレストロイカ映画」と題してミニ解説を行いました(写真)。



なお、ロシア語映画発掘上映会は、この1月7日にも行われ、ヴァレリー・トドロフスキー監督の「スチリャーギ」(2008年作)が上映されました。今年もまだまだ上映会の企画が続きそうです。



第31回創価大学ロシア語スピーチコンテスト

優勝者は上智大学の梯さん

いま、日本国内にはロシア語の能力を競い合う催しがいく つかありますが、中でも創価大学のロシア語スピーチコンテ ストは知名度が高く、規模が大きいものの1つです。

昨年12月17日、私はこのスピーチコンテストへ来賓として出席してきました。私たちJICはこのコンテストに長年協賛していて、優勝者に賞品を提供しているのです。

コンテストはエレメンタリー部門とスタンダード部門(対面・ビデオ)に分かれていて、ロシア語を学習中の人なら誰でも出場できます(ただしロシア語能力には制限があります)。エレメンタリー部門は全員共通の課題文の暗唱、スタンダード部門は自作のスピーチを行います。去年からはスタンダード部門に事前収録ビデオでの出場形態が加わり、遠方からの出場のハードルが格段に下がりました。

コンテストには、全国各地から 21 名の弁士が出場し、みなそれぞれにロシア語学習への情熱を披露しました。

- ・エレメンタリー部門第1位は岩岡正悟さん(ロシア極東連 邦総合大学函館校)
- ・スタンダード・ビデオ部門第1位は黒澤百果さん(社会人)
- ・スタンダード・対面部門第1位は梯 桃真さん(上智大学) 梯さんには「創立者賞」が授与され、JICからは賞品として、サンクトペテルブルグの語学学校でのロシア語オンラインレッスン(8日間)の目録をお渡ししました。

実は私たちは長年、モスクワ往復航空券を優勝賞品にしていました。しかしいま日本では、多くの学校が、安全上の理由から学生にロシアへの渡航を禁じています。学生さんが優勝した場合、せっかく航空券を受け取ってもそれを使わせてもらえない事態が発生する可能性が大きいため、22年から賞品をオンラインレッスンに切り替えたのです。

新型コロナとそれに続く戦争で、ロシアへの留学生が壊滅的に減少し、すでに数年が経過しました。このままでは、将来専門家となるべき人材が枯渇してしまうことを真剣に懸念しています。また、航空券を賞品として提供できる日が戻ることを強く願っています。(報告;岡本健裕・JIC大阪)